

復活節第五主日

2017.5.14

ヨハネ 14・1-12

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高神父

「わたしは道であり、真理であり、いのちである」。わたしたちになじみ深い、みことばです。けれども、わたしたちになじみ深いイエスのこのみことばは、日々の生活を生きるわたしたちの心に、どれほど深く食い込んでいるでしょうか。そのことを反省するために、これに続くみことばが、わたしたちの心にとのような反応を引き起こすか反省してみたらよいかもしれません。

「わたしは道であり、真理であり、いのちである」というみことばに続けて、イエスは「わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことは出来ない」と言われるのです。このみことばはわたしたちをたじろがせます。わたしたちが生きる日本の社会の中で、キリスト者ではない人々を前にして、みことばのこの部分を公言することに気おくれとためらいを感じてしまうのは、わたしだけのことでしょうか。今日の福音のみことばのこの部分までの箇所は、葬儀の儀式書の中で、朗読指定箇所になっています。「わたしは道であり、真理であり、いのちである」というみことばまでは、通夜や葬儀の場で、亡くなられた信者の方を悼みつつ、お送りするのにふさわしいみことばで、参列しておられる皆さんの心にも届く聖書のみことばであると思います。けれども、これに続く「わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことは出来ない」というみことばは、信者ではない参列者の方々の心にはどのように響くでしょうか。このみことばは、その方々の心を凍りつかせてしまうようにわたしには感じられて、どうしても、このみことばの最後の部分まで朗読することが出来ません。キリスト者として神のみもとに召された方と、その方の死を悲しむ信者ではない参列者の方々との間を、このキリストのみことばは引き裂いてしまうように感じられないでしょうか。キリスト者ではない参列者の方々が、葬儀のその場でこのようなみことばを聴く時、キリスト者であった、自分たちが愛するその人が自分たちとは縁のないところへ行ってしまったと感じられるのではないのでしょうか。キリスト者になるつもりのない、ただただ自分たちにとって大切なその方の信仰を尊重して、悲しみのうちにお見送りするために教会の葬儀の場に参列しておられる方々にとって、このみことばはあまりにも残酷であるのではないのでしょうか。

「わたしは道であり、真理であり、いのちである」。カトリックの信者としてわたしたちはこのイエスのみことばを信じています。けれども、このように言われるイエスを、このみことばのままに信じるのが、この日本の社会に生きるわたしたちに何の違和感も何の苦痛も感じさせないとしたら、わたしたちは骨の髄までカトリック信者になりきる事が出来たか、あるいは、まだ本当には、このイエスのみことばを受け入れてはいないかのどちらかです。

「わたしは道であり、真理であり、いのちである」と呼びかけてくださったイエスに向って、「あなたこそ、私にとって道であり、真理であり、いのちです」とお応えすることが、カトリック信者としてのわたしたちの信仰です。このような信仰を受け入れて、それによって生きるためには、わたしたちは自分の人生に向かい合わなければなりません。「わたしは道であり、真理であり、いのちである」という呼びかけは、わたしの人生に向けて呼びかける招きであり、それに応えるということは、その招きにわたしの人生を賭けるということだからです。

家族や、職場や、友人たちとの人間的な絆の中に生きるわたしたちは、その中に生きる自分に目覚めなければ、本当の意味で自分の人生に向かい合うことはできません。自分一個の人生に目覚め、それと向き合うということは、人間的な絆を大切にすることをわたしたちにとって勇気のいることです。わたしたちが自分の人生に目覚め、それに向って歩み始めようとすると、お互いの絆を大切にすること人間関係の中で軋轢を経験せざるを得なくなります。そして、その軋轢はわたしたちの心に悲哀をもたらします。けれども、人は皆こうやってそれぞれの人生を生きているのではないのでしょうか。そうやって、それぞれの人生を生きるお互い同士が縁あって絆に結ばれ、支えあって生きているのではないのでしょうか。

人間同士のお互いの絆が、わたしたちにとってどれほど貴重なものであっても、それぞれの人生を生きるわたしたちにとって、それが最終的に自分の人生を支える事が出来るものではないことをわたしたちは知っているはずで。愛する人の死が、わたしたちに深い悲しみをもたらすのは、わたしたちを支えていたその人との絆を死が奪い去ってしまったことを知るからです。わたしたちが真の意味で、自分の人生と向き合うのはそのような時かもしれません。そのような悲しみの経験を通して、自分の人生に向き合わざるを得ないわたしたちに、イエスはあのおことばを語りかけてくださるのです。「わたしが道であり、真理であり、いのちである」。

イエスが道であるのは、支える絆を失って、自分の人生の行く手を見失ったわたしたちに道を開いてくださるからです。

イエスはどのようにして、わたしたちの道となってくたさるのでしょうか。十字架の死を越えて、御父のもとに行かれたイエスは、そのいのちの世界にわたしたちを向かえるために、わたしたちのもとに戻ってきてくださったのです。それがイエスの復活です。その復活によってイエスはわたしたちの道、真理、いのちとなってくたさったのです。イエスのあの十字架こそが、御父のいのちの世界への道であることを、復活のイエスはわたしたちに示してくださったのです。わたしたちが経験している全ての苦しみをイエスはあの十字架において、ご自分の痛みとしてくださり、そうすることによって、わたしたちにはその意味が分からない、わたしたちの全ての痛みにも意味があることを示してくださったのです。わたしたちの全ての痛みは、イエスの十字架の痛みに結ばれることによって、イエスの御父である神に受け止められていること示してくださったのです。

「わたしは戻って来て、わたしがいるところにあなたがたを迎える」。復活のイエスのおことばです。わたしたちの全ての痛みを、ご自分の十字架の痛みによって知ってくださったイエスは、痛みの中にあるわたしたちのもとに戻って来て、わたしたちを御父のいのちの世界に迎え入れてくださるのです。わたしたちにとって最後まで謎であった、この世の痛みの意味を解き明かすことができるのは、十字架の死を越えて復活されたイエスだけです。「わたしは真理である」と言われるイエスを、わたしたちの人生の中に迎えることによって、わたしたちに理解できなかったわたしたちの人生の謎はなくなり、いのちに満ちた真理の喜びを知るのです。

わたしたちの痛みの全ては、出口のない闇に終わるのではなく、復活のイエスがそこにわたしたちを迎えてくださる、父なる神のいのちの世界への道であったことを悟るからです。

そのいのちの世界で、わたしたちはこの上ない喜びを味わうことでしょう。「わたしの父の家には住むところがたくさんある」というイエスのことばに慰められるからです。この世の痛みの中で、御父が結び合わせてくださった絆によって互いに支えあって生きた、愛する者たちのためにも場所が用意されていることを知るからです。

「わたしは道であり、真理であり、いのちである」。この今日のみことばが、わたしたちの体の中に、血の中に、深く、深く、浸み込んでゆくことを祈り求めたいと思います。